

主 題：舌を制御する2

聖書箇所：ヤコブの手紙 3章13－18節

何を話すかではなくてどのように生きるかが肝心であるとヤコブは私たちに語ります。本物のクリスチャンの証拠はその人の生き方、行動にあるのだとヤコブはこれまで私たちに教え続けました。教師は自分のことばに気を付けなければいけないと教えました。神への賛美とのろいと同じ口から出て来ることを赦してはならないと。そのためには、まず生まれ変わることが必要です。神から罪の赦し、救いを得ることが必要です。そして、その神の助けによって私たちは自らの舌を制御しようとするのです。つまり、神が喜ばれるようなことをいつも話せるように、神が喜ばれるようなことをもって人を教えることができるように、この口からのろいと賛美が出てこないように、この口を神への賛美、神が喜んでくださるもののために用いるように、そのことが神の助けによって可能になるのです。救われた人が救ってくださった神に信頼することによって、そのようなことが可能になって行くのです。

ヤコブは私たちが前回見たように、舌を制御することの大切さと同時にその難しさを、この3章に入って教え始めました。あなたがイエスを信じたらあなたはその口から一度も悪いことばを出さないであろうと、そのようなことなら私たちは皆失格者です、残念ながら、私たちは言わなくてもいいことを言い、正しいことを間違った言い方で言うてしまう者です。そのことは神もご存じです。ヤコブが私たちに教えることは、本当に救われているのなら、あなたはそのどうしようもない舌を制御するはずだということです。そのように願って生きるはずだと言います。なぜなら、前回見たように、この舌というのはサタンの道具として用いられることにもなってしまうからです。サタンの目的と計画を達成するために用いられる可能性があるのです。もし、私たちが神に喜ばれないことを口から出すなら、それはサタンの道具になっていることは明らかだと言います。そのようなことがあってはならない、そのために私たちは自らのことばに注意を払わなければならないのです。イエスはマタイ12章でこのようなことを言われています。「12:34 まむしのすえたち。おまえたち悪い者に、どうして良いことが言えましょう。心に満ちていることを口が話すのです。:35 良い人は、良い倉から良い物を取り出し、悪い人は、悪い倉から悪い物を取り出すものです。:36 わたしはあなたがたに、こう言いましょう。人はその口に作るあらゆるむだなことばについて、さばきの日には言い開きをしなければなりません。:37 あなたが正しいとされるのは、あなたのことばによるのであり、罪に定められるのも、あなたのことばによるのです。」、イエスが教えられたことは、私たちの心の中にあるものが出てくるのだということです。ですから、私たちが一生懸命外側を変えようとしても、心が変わらなければどうにもならないのです。悪いことを言わないために一生懸命いろいろな修行を積もうとしても、内側が変わらない限り、私たちの口からは言いたくないことが出てくるのです。ですから、この世の宗教というのは全く力がないのです。私たちを根底から変えることはできません。私たちはこの聖書によって、イエス・キリストによって新しく生まれ変わることができ、そのとき神は私たちの心を変えてくださる、そして、心が変わって行くことによって私たちのことばが変わってくるのです。そのことによって、私たちが本当に救われているのだということが明らかだとヤコブは教えたのです。

ことばに気を付けなければいけないとヤコブは言いますが、今度は、教師は自分のことばに気を付けるだけでなく、その行ないにも同様に注意を払うことが必要だということを13節から教えて行きます。というのは、教師は知恵があり賢い人であるはずですが、もちろん、前回見たように、人前で教えることだけでなく、家庭にあっても親は子どもにとって大きな教師です。職場においてもイエス・キリストを信じる者はまだイエスを知らない人に大切なことを教える教師と言えます。ですから当然、教師は賢い知恵のある歩みをするように神から望まれているのです。確かに、このヤコブの時代には多くの人々が自分には知恵がある、自分は賢いと自負していました。そこで、ヤコブは彼らに言うのです。本当にあなたに知恵があるのか、あなたが賢いのかどうかはあなたの行ないによって分かると教えます。その人のことばがその人の霊性を示したように、その人の生き方がその人に本当に知恵があるかないかを明らかにするとヤコブは教えるのです。私たちは日々の生活においてどのように歩んでいるのか、どのように生きているのか、ここに問題があるのです。これが大切なのです。どのような選択をすることが神を喜ばせるのか、そのことを考えながら、いろいろな状況において確かに選んでいるかどうか、そのことを考えて見るようにと、ヤコブは私たちにチャレンジを与えるのです。

13節に「あなたがたのうちで、知恵のある、賢い人はだれでしょうか。その人は、その知恵にふさわしい柔らかな行ないを、良い生き方によって示しなさい。」と記されています。このようなことばを見たときに私たちが理解しなければならないことは、ギリシャ人たちはどれだけのことを知っているかによって知恵があると言います。学位をたくさん持っているならその人は知恵があるというような見方を人々はしたの

です。しかし、ユダヤ人は違いました。ユダヤ人にとって賢い知恵ある人というのはどれだけのことを知っているかよりも、その知っていることが実生活にどのように生かされているかによって知恵があるかないかを判断したのです。この違いはお分かりでしょうか？ユダヤ人の中での関心ごとは、その人たちがみことばを学び、神のみこころを知ったときに、それをどのように実生活に適用したのか、そこにあります。それができていればその人には知恵があるというのです。たくさんを知っていてもそれが実生活に生かされていない人は、ユダヤ人から見ると知恵がないと見なされたのです。ですから当然、ヤコブがここで言わんとしていることは、どれだけの知識を持っているかではなく、それが実生活に適用できているかどうか、適用しているのかどうか、そのことです。ですから、知恵のある賢い人はそれが顕著に現われると言います。「…その知恵にふさわしい柔和な行ないを、良い生き方によって示しなさい。」と、つまり、その人の生き方が知恵があるかないかを明らかにすると言うのです。

ここに二つのことを見ます。「**柔和な行ない**」、これは、非常にへりくだった、謙虚な姿勢です。主の主権の前に自らへりくだること、神の前にへりくだることです。これはちょうど、野生の馬が飼い主にとって乗ることができるように馴らされるという意味でも使われます。弱さではなく、自分の力をコントロールすることです。誇ろうと思えばいくらでも誇ることができる、でも誇らない、ねたんだり敵対心を持つこともしようと思えばできる、でもしない、そのことを言っているのです。知恵のある賢い人の特徴としてまず言えることは、その人は謙虚だということです。傲慢であったり、人をさばいたり自分が最高であると誇り高ぶっている人は、賢くない知恵がないとヤコブは言います。

もう一つのこと、「**良い生き方**」と記されています。知恵のある人は柔和なだけでない、その人は模範的な生き方をする人だと言います。私たち、特に日本人はよく「私を見習ってください」とはなかなか言えないものです。そのようなことを言うと高慢だと思われてしまうから…と。だから、遠慮して「私を見ないでください、私は不完全ですから」と言ってしまいます。でもパウロはそのようには言いませんでした。「私がイエス・キリストを見習っているように、私を見習ってください」と言いました。これがクリスチャンの生き方です。彼自身も人々にとっての模範になろうとしたのです。彼はイエス・キリストを見て、イエスが歩まれたように歩もうとしたのです。失敗もしましたが、そのときどのように正しくふるまうのか、その問題にどのように正しく対処するのかを考えて行ないました。ですから、彼は自分は完全だと言ったのではなく、不完全な者だが、主に従っている者として、どうぞ私の生き方を見て私から学ぶようにと言ったのです。ということは、私たちクリスチャンは後から続いて来る人の模範にならなければいけないのです。後から続いて来る人が私たちの生き様を見て「そうだ、私もそのように生きよう、あのように信仰を主にしっかりおいて歩んで行こう」となるように、そういう責任があることを私たちは忘れてはならないのです。「私は不完全ですから」とそれを口実に使うかもしれませんが、なぜそのように言うのかを考えなければいけません。もしそう言うことによって、今自分がしていることを正当化したり、継続しようとするなら、それは間違っています。私たちは失敗しながらも主に従って行こうとするはずです。そして、私たちの生き様は後から続いて来る人の模範にならなければいけないと言うのです。

知恵のある賢い人というのは、謙遜を身にまとして謙虚に生きるだけではない、主の前に正しく歩んで行こうとします。その生き方が後に続く人の模範になるのです。ヤコブはそのことを「**示しなさい**」という命令で13節の最後に与えています。このように歩んでいない自称教師たちがたくさんいたのです。だから、ヤコブはそのような間違った生き方を止めて、今から正しい生き方を始めなさいとその命令を与えているのです。

さて、この後ヤコブは、14-16節で間違った知恵について、偽りの知恵について教えます。それによって、自分自身を吟味し、そのような間違った知恵によって歩んで行かないためです。そのような歩みをしている人は霊的でない、賢くないとヤコブは言うのです。

I. 偽りの知恵 14-16節

その知恵とは、

1. 無力である、何の力ももっていない

どのようにその知恵を積んでもそれが私たちの心を変えることはないのです。14節に「**しかし、もしあなたがたの心の中に、苦いねたみと敵対心があるならば、誇ってはいけません。**」とあります。その人が何を語るかではなく、その人の心の状態を指摘するのです。もし、あなたの心の中に苦いねたみ、人に対する憎しみや恨み、悪い思いがあるなら、あなたには知恵がない、賢くないと言うのです。敵対心ということばをヤコブは使っています。自分の地位を求めて運動することです。争い、闘争、論争好きな人、いつも文句を言う、いつもネガティブで、神の方を向こうとしているのにそれを妨げる、批判的である、心の中にそのような問題があるのです。このことばの元の意味は、女性が賃金のために糸を紡ぐことで、

そこから個人として、また集団的に、私利私欲のために働いて行くという意味をもつことばになってきたのです。このことばが政治の領域に入るとこのような意味をもちます。他のものはいっさい廃絶して自分のためだけを思う党派心、自分のことしか考えない、人のことなどどうでもいい、自分の私利私欲のためだけ、とこのような意味をもつことばです。ヤコブはここで、立派なことを話しているかもしれないけれど、あなたの心が問題だと言うのです。もしあなたの心の中に人に対する間違っただけの思いがあるなら、そして、あなたが人のことよりも神よりも自分のことを考えて、その思いによって行動するなら、あなたには知恵がないと言います。そして、そのような偽りの知恵をどれだけつかんでも、心の中にあるねたみや敵対心という罪を拭き去ることはできないと言います。世の中の知恵をどれだけ蓄えたとしても、その知恵はあなたの心を変えさせることはない、あなたを生まれ変わらせることはない、無力なのです。そして、14節の最後に「**真理に逆らって偽ることになります。**」とヤコブが言ったのは警告です。神の関心は私たちが何を話すかではなく、私たちがどのような存在であるかです。そこに神の目が注がれているのです。だから「**誇ってはいけません**」というのは、心がそのような状態であるのに私は知恵がありますと自分の知恵を誇っても、それは空しいことであり、真理に立っていない、うそだと言います。誇れるものなど何もない、間違っているということ指摘したのです。このような人が読者の中に存在したのです。教会の中にこのような人がいたのです。空しいものを誇る人です。

偽りの知恵がどうして空しいのか、ヤコブは説明します。15節を見てください。「**そのような知恵は、上から来たものではなく、地に属し、肉に属し、悪霊に属するものです。**」

(1) 地に属するから

それは神から来たものではなく「地に属するもの」だと言います。つまり、これはこの世的な基準での考えであるとか、この世が考える成功であるとかというこの世のことです。私たちがそのようなことにすぐに汚染されてしまいます。私たちはその人の外見を見て、どのような教育を受けたのかとか、どれだけの本を書いているのかとか、そのようなことを見て、この人は賢い人だと判断するのです。また、私たちがこの世的なものの考え方で人を見てしまったりします。この人は成功したと、どの基準でそのように言うのでしょうか？世の中の基準です。パウロはこのように言っています。Iコリント1：20「**知者はどこにいるのですか。学者はどこにいるのですか。この世の議論家はどこにいるのですか。神は、この世の知恵を愚かなものにされたではありませんか。**」、また24節でも「**しかし、ユダヤ人であってもギリシヤ人であっても、召された者にとっては、キリストは神の力、神の知恵なのです。**」とあります。ヤコブが私たちに教えることは、この世の価値観で見えてはならないということです。神の関心は本当の知恵があるかないかです。知識の初めは何ですか？知恵の初めは何ですか？主を恐れることです。それが本当の知恵なのです。私たち人間に神は何を求めておられるか、私たちが主を恐れて生きて行くことです。主を恐れるということは、罪から離れて行くこと、神のみこころに従って行くことです。そのような生き方をしている人こそ神の前に知恵ある賢い人と神は言われるのです。世の中はそうに言いません。変わっていると言うかもしれませんが、宗教的だと言うかもしれませんが、しかし、私たちが覚えることは世の中の基準ではなく、神の基準です。それは神のみことばをしっかりと学び、そのみことばによって生きる人、日々のいろいろな状況においてよく考えて、何が神を喜ばせることなのかを判断し選択して行く、そのように生きて行くことができる人、それが知恵ある人だということです。だから神は試練をくださるのです。応用問題です。それはときに厳しいものですが、そこで私たちは学んで行くのです。人生の歩みにおいても同じことです。神はテキストであるみことばを通して、こうありなさい、このように生きなさいと教えてくださる、そして、実際に私たちは日々の歩みにおいて、その応用問題に出くわし、それによってより深く学んで行きます。それができる人が知恵のある賢い人だと言います。ですから、私たちはこの世的なものの見方、考え方、基準を捨てなければいけません。私たちは人との比較を止めなければいけません。そのことを繰り返してヤコブは教えてくれたのです。私たちが求めるべきことは人からの評価ではなく、私たちが造り、私たちが生かし、そしていづれ私たちがさばきを受ける神からの評価です。神がどのように見られるかに目を留めて生きるべきです。

(2) 肉に属するから

このことばは新約聖書に6回出てきます。霊的なものと対比するためにこのように言います。ヤコブが言うのは、他の動物と同じだということです。動物もそれぞれの知恵を生かしながら生きています。あなたが神を忘れて生きるというのはまさにそういう生き方だと言うのです。動物と変わらない、どうすれば自分の欲求を満たすことができるのか、自分のほしいものを手にすることができるのか、そういうことであくせくするというのは、まさに動物が空腹だから腹を満たすために食べ物を捜しているのと変わらないと。それは神が私たちに望んでいる知恵ではないのです。

(3) 悪霊に属するもの

この世の知恵によって私たちが生きて行くなら、それは悪魔を喜ばせることだとヤコブが言うのです。

私たちクリスチャンが神のおことばに従って行くことより、この世の知恵に従い、この世の知者と言われている人たちのその知恵に感動し、その知恵に従って行こうとするなら、それは間違っているのです。もちろん、この世には神から特別な才能を与えられた人がたくさんいます。昨日はロケットが打ち上げられました。すごい知恵です。すごい知識です。しかし、神の前に彼らは知恵のある者かどうかと言われたら、神を恐れているかどうか、神はそこで判断されるのです。すべてのことをご存じの神が私たちに知恵をくださった、私たちはこの知恵に従って生きて行くことができますのです。この知恵こそが私たちに必要なのです。だから、私たちはみことばを学ぶのです。みこころを探ろうとするのです。それが、私たち神によって贖われた者が神から教えられたことです。この神に幸せがある、この神に喜び、満足があるのです。私たちの生活が本当に祝されたものになって行くためのカギは、この神の知恵によって生きて行くことです。みことばに従って生きて行くことです。そのことをヤコブは繰り返し私たちに教えるのです。

間違った知恵によって生きて行くならどうなるでしょう？その結果が記されています。16節「**ねたみや敵対心のあるところには、秩序の乱れや、あらゆる邪悪な行ないがあるからです。**」と、これが結果なのです。間違った知恵がもたらすのは問題でしかないのです。だから、この世の中は問題があふれているのです。これだけ教育を受けた人たちがたくさん集まっていながら、人間が集まると問題だらけです。世の中の知恵がもたらすものはそのようなものだと言います。しかし、残念なことに教会の中にもこの世の中の知恵が入り込んでしまって、同じように問題が起こってきます。神に贖いだされた私たちクリスチャンの責任は、個人個人が神のみことばにしっかり立つことです。みことばに従って生きて行くことです。確かに、私たちは誘惑の中に生きています。パウロは「知識は人を高ぶらせる」と言っています。残念なことに、私たちはものごとを知れば知るほどにそのことに高ぶりを覚えるのです。これだけ私は知っている、あなたより知っている。4～5世紀に最大の神学者と言われたアウグスティヌスはこのようなことを言っています。「救われる前は私は自らの知性、知識を誇りとしていた。これが信仰の妨げでした。しかし、自らのプライド、また人生を思いのままにできるというような思いを捨てたのち、すぐみことばを通して神の知恵を得た。」と。自分の力でできる、自分は知恵があると、そう思って生きていたとき、その生き方は神を人生から追い出していたのです。謙遜を学ぶことが必要です。そのためには私たちはしっかり見るべきことを見ていないといけません。もし私たちが自分の手で、自分の知恵でこれだけのことを築いたのだと思っているなら大変です。教会を見たときにも、これだけの教会だとか、こんなすばらしい建物だとか、そのようなものを私たちは誇るものではありません。教会に集まる人数を聞かれます。それが、祈るため、神のわざを知るためでないときは空しいものです。教会の大きさなどどうでもいいことです。私たちが神から示されていることは、どのように生きた教会を造るかです。箱ではないのです。個人です。イエスを信じた一人ひとりがどのように神のみこころに従って変えられて行くのか、それが教会に与えられた大きな使命です。伝道とともに、私たちは自らを成長させるためにみことばを学び、それを実践して行こうとするのは、自分が変えられて行くためです。それが教会です。どんなに人数が少なくても、神のみことばを愛して、神を愛して、神を恐れて忠実に生きようとしている人たちがいるなら、その教会は祝された教会です。私たちが目を向けなければいけないことは、神がなしてくださるわざです。私たちの責任はあります。神のみことばに従って生きて行くことです。その結果、神がどのようなみわざをなさるか、それは神のわざです。気をつけなければいけないことは、私たちがしたことではないのに、私たちがしたかのように誇ってしまうことです。神のあわれみによると覚えるべきです。すべてのことを通して神を称えるのです。すべてのみわざは主がなしてくださるのです。そして、神だけがお受けになる栄光を奪ってはいけないのです。パウロが啓示が余りにもすばらしかつたところのように言いました。Ⅱコリント12：7「**また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。**」と、いかに私たちが砕かれるて行くのか、そのことが大切です。偽りの知恵というのは私たちを持ち上げます。本物の知恵というのは神を持ち上げます。

Ⅱ. 本物の知恵 17－18節

このような知恵を私たちは自らのうちに見出すことを求めて生きて行くことが必要です。八つの特徴が記されています。

1. 純真

17節「**しかし、上からの知恵は、第一に純真であり、**」と、これはきよさです。神の知恵は混ざり物がない、きよいものです。だから、その知恵によって生きる人たちも同じようにきよさを求めるのです。神の知恵によって生きている人は、当然きよく生きて行こうとします。如何なる悪からも離れて行こうとします。それが神の知恵によって生きている人です。

2. 平和

「次に平和、」とあります。先に見たように、人間の知恵は争いをもたらします。しかし、神の知恵は平和を生み出すのです。なぜなら、神の知恵によって神を深く知るほどに自分が見えてきます、自分が見えると自分のうちには何一つ誇るものはないと分かってくる、そうすると私たちはへりくだって行きます。人間関係の問題はどちらが上につくかです。そのことを争い始めると問題が起きます。しかし、私たちが自分から率先して相手に仕えようとするとき、争いは止みます。神の知恵によって私たちは平和を作り出すことができるのです。

3. 寛容

「寛容、」、このことばは別の箇所では、温和、やさしいという訳がなされています。つまり、へりくだった人です。人からの批判、悪口に対しても、その人を責めたりしないのです。難しいことです。人から悪く言われたらその人のことを悪く思うのは簡単です。しかし、それは知恵がない人です。神から知恵を受けている人はそのような批判をされたとしても、それに対して報復しようとはしないのです。イエスの山上の説教「柔和な者は幸いです。」と重なります。ヤコブはそれをここで繰り返したように思えます。神の知恵をいただいている人は柔和、寛容なのです。つまり、人から何と言われてもどんな批判を受けても、自分はそれ以下の者だと知っているのです。それは本当の自分を知っている人です。だれもそれは分からない、どれほど自分が醜く汚れているか、どれほど罪深い者かということはある程度自分は知っています。神の知恵は私たちを寛容な人へと変えて行くのです。

4. 温順

「温順であり、」、これは「良く」ということばと「従う」ということばが合成してできたことばです。頑なにならないということです。学びに対して、学んで行こう、もっともっと成長しようと心を開いている人のことです。神のことばに喜んで耳を傾け、その内容を祈りながら考え、そのみこころに従って行こうとする人です。ですから、神の知恵をいただいている人は、神に対して、どうぞ神さまお語りください、私は聞いていますから教えてください、あなたのみこころに従って行きたいとそうように求めている人だと言います。

5. あわれみ

「あわれみ…に満ち」とあります。これは苦しみの中にいる人への愛であり、またそのような人とともに苦しむということです。また、人々が自らに犯す罪に対する許しの気持ち、それを表わしたことばです。ある神学者が、キリスト者の同情というのは神の同情の反映であると言っています。しかも、この「満ちている」というのはそれによって支配されているということです。神の知恵をいただいている人はあわれみはその人の心を支配しているということです。なぜそのようなことができるのかというと、それは自分がまず神のあわれみをいただいたことを知っているからです。マタイ18章で1万タラントの借りがあつたしもべが赦された話が出てきます。免除されたのです。ところが、今度はその赦された者が100デナリを貸している友人に出会ったとき、友人はあわれみを求めたのですが、赦された者はその友人を赦すことができなかつた、皆さんよくご存じのとえです。そこで、主人がこのように言います。マタイ18:33「私がおまえをあわれんでやったように、おまえも仲間をあわれんでやるべきではないか。」と。ですから、私たちが本当に人に対してあわれみの気持ちを持つためには、まず自分が神からどんなに大きなあわれみをいただいたのかを覚えなければならないのです。神の知恵をいただいた人はそのことをしっかり覚えているのです。ルカ6:36でイエスは「あなたがたの天の父があわれみ深いように、あなたがたも、あわれみ深くしなさい。」とされています。そして、関連していることですが、次に、

6. 良い実に満ち

「良い実とに満ち」、良い働き、行ないのことです。先ほど見たように、クリスチャンの人々に示すあわれみというのは、必ず行動が伴って行くということです。かわいそうに思うだけではないのです。それを行動で現わして行くのです。ですから、「あわれみ」と関連あることとして「あわれみと良い実とに満ち」と記されているのです。それが支配しそのような生き方をしている、それは神の知恵によって生きているからと言うのです。

7. えこひいきがない

「えこひいきがなく」、すべての人を神が愛してくださっているゆえに、同じように人を愛そうとするのです。このことはヤコブがもう何度も繰り返して教えてきたことです。

8. 見せかけのないもの

「見せかけのないものです」、うそ、偽りが無いということです。偽善者というのは仮面を被っている人、役者のことです。本当の自分でないものを演じる人です。神の知恵によって生きている人というのは見せかけではないのです。裏表がないのです。パリサイ人や律法学者はイエスによって厳しい非難を受けました。というのは、彼らはことばで言っていることと行なっていることが違ったからです。

見てきたように、この世の知恵によって生きる人々と、神の知恵によって生きる人々とは、こんなに大きな違いがあるのです。私たちが覚えておかなければいけないことは、私たちはいつか神の前に立ちます、そのとき、神からの審判をいただくときに、神は私たちの心をちゃんと見ておられて、それに基づいてさばきをなすということです。ヘブル4：13にこのようにあります。「**造られたもので、神の前で隠れおおせるものは何一つなく、神の目には、すべてが裸であり、さらけ出されています。私たちはこの神に対して弁明をするのです。**」と、その備えをしなければいけないということです。ことばと行ないが一致しているかどうか、そうであればあなたは知恵がある、賢いと言います。ところがそうでなければ、まだまだあなたにはこの知恵がないと。どうすればいいのか私たちはもう分かっています。みことばをしっかり学んで、このみことばに従って行こうとするのです。神がそれを助けてくださるから。そのようにして私たちは成長するのです。一日に急に成長することはありません。着実に歩いて行くのです。

さて、このように神の知恵によって生きている人々の結果が18節にあります。「**義の実を結ばせる種は、平和をつくる人によって平和のうちに蒔かれます。**」と、その人は平和をつくり出して行くと言います。先ほど、この世の知恵によって生きる人は争いを巻き起こす、問題をもたらすと見ましたが、神の知恵によって生きる人は平和をつくる、平和をもたらすとヤコブは教えます。「**義の実を結ばせる種**」と、ヤコブが言うことは、本物の種は義の実、すなわち、本物の救いをもたらすものだということです。この実には義が含まれるのか、義がこの実を实らせるのか、いろいろな解釈がありますが、ヤコブが言わんとすることは、何度も見てきたように、本物の信仰というのは必ず行ないをもたらすということです。本当の種はその人のうちに義を实らせて行きます。私たちは生まれ変わったから、そのうちに存在しているものが神からのものであることを、私たちは確信をもつことができるのです。何の変化ももたらさないなら、その信仰は死んだ信仰です。生きた信仰は私たちに変化をもたらすのです。原語にはこの「種」ということばは出てきません。「義の実が蒔かれる」となっています。種を蒔くのであってだれも実を蒔きません。では、なぜこのようなことをヤコブは言ったのでしょうか？それは、私たち自身の生き方による証を言いたいからです。私たち自身のうちにあるその実をもって人々の前で証をするように、というのがヤコブが教えたいことなのです。私たちはよく「福音の種を蒔きましょう」と言います。イエスの十字架と復活を伝えて行きましょうと、ことばをもってそのようにします。しかし、同時に大切なことは、私たち自身の生き様をもってこのキリストを証するということです。どのように神が私たちを変えてくださり、どのような実を私たちのうちに実らせてくださっているのか、その神のみわざを人々の前に証するのです。生き方による証です。その人の特徴は平和なのです。神の知恵によって生きている人の特徴は平和なのです。争いではありません。争いがあるのはどこかに問題があります。神が救ってください、その人たちに平和をくださった、それは妥協することではありません。その平和をもって人々と接して行くのです。神を愛し神に従って行くその生き方が私たちに平和をもたらしてくれる、私たちを祝してくれる、そして、その生き方が他の人に伝わって行くのです。

ヤコブが最後に訴えることは「**義の実を蒔きなさい**」ということです。あなたの生き方、生き様をもってどんなに主が素晴らしいことをしてくださったのかを明らかにして行きなさい、そして、それによって、周りのイエスを知らない人々も同様に、この素晴らしい平和のうちに招き入れられて行くと言うのです。どれほど、ことばだけでなく行ないが大切なのか、私たちのことばは心から出てくるものです。ことばを制御するには心が神の知恵によって満たされていることが必要です。だから、このようにことばだけでなく行ないをもってキリストを証するように、そして、そのようなことをなす人々こそ本当に救いに与っている人々であると、ヤコブは私たちに教えてくれるのです。

救われている皆さん、大きな責任があります。あなたが主に忠実に歩むことによって、あなたの主であり救い主であるこの偉大なお方を証し続けてください。まだ、イエスを信じておられない方も、主はあなたに素晴らしい救いを与えようとしてくださっています。心を開いてこの救いをあなたのものにしてください。